

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和2(2020)年
2月号
通巻594号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和2年2月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷 監修
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



カルガモ 旧大乗院庭園にて(奈良市高畑町)

奈良県生駒郡斑鳩町 上本雅史さん撮影

再録 『すさのお』紙より

庶民の生活に深く根ざした土着信仰 (全16回)

法主 矢追日聖

(十一)

昭和43(1968)年9月23日発行

『すさのお』第24号より

(法主、満56歳)

昭和四十一年十一月十三日であった。大阪空港発、松山行の全日空YS11旅客機は、着陸に失敗して、四国松山沖で墜落、乗客ら五十人全員が海中で死亡するという悲惨な事故が勃発した。その乗客の中には新婚の幸せを夢みて旅立った十一組の若きカップルがあったと聞く。涙あたらなるものがある。

明くる日の夕方、大阪府警と全日空のヘリコプター二機が、この遭難の全日空機を捜索中これまた何の因果か、誤って空中衝突を起こし、搭乗員四人が死亡するということ二重遭難となった。

凡そこの世に於いて発生する幾多の災厄や大惨事のすべてを、現在の時点に於いて勃発以前に予知したり、またそれを未然に防止する能力をもっている人間は実在しない。寝床の中で安眠の夢をむさぼっていても、トラックに轢かれて即死するような物騒な世の中である。

だからこそ不思議なことのようにだが、この世でできた如何なる悲惨事でも、時間が立てば何かの形で鎮まりかえり年々歳々にやがては忘れてゆくものである。人間がもつ全知全能をもってしても、無事故の保障が、どうしてもできないと

すれば、むしろ事故の発生は常識的に認めなければならぬまい。

さきの全日空の場合に於いても、事故そのものに重点を置いて考えれば、乗客には何のかわりもなく、全く降って湧いた災難であり、一方的に全日空側に責任はあるわけだが、ここで更に振り返って、事故を起こした飛行機に乗らねばならなかった乗客側に視線を向ければ一体どういうことになるのだろうか。

死ぬことは人間の宝である

年中数知れないほど飛行機は全世界の上空を駆けめぐっている。その中で墜落した飛行機は微妙な数字に過ぎないのではないか。その九牛一毛にも等しい遭難機に、よりにもよって乗らなければならぬ復雑微妙な諸条件を持ち合わせていた遭難者自身にも、不可思議な宿命のものが内在していたことを、私達は考えなければならぬと思う。

ひとたびこの世に生まれた者は、必ず一人残らず死ぬという定めがある。けれどその死ぬ時期や死の方については千差万別で、これを定めているものもない。死の条件は人毎にそれぞれ異なっていることは衆知の通りである。

本来の意味の死というものは、他から何かによつて死なせるものではなく、それは生まれた時、先天的に自分自身もつてきた宝である。言い換えば、人間誰もが、死という宝珠を胸にかたく抱いて生まれてきたのである。死があればこそ、私達は幸福で有意義な生涯を送ることができるのである。

死ぬことは誰もがいやがる。であるのに、いやがりながら誰もが死んでゆかねばならないのが現実である。大阪空港を飛び立った時、五十人の乗客は寸前に大きな墓穴が待っていたことなど思いもよらなかつたであろう。

気は現象より先行する

想えば、この松山沖での墜落事故のあつた日から十五日前に当たる十月二十九日、私は丁度事故現場の三津浜から、十二時三十五分発のフェリーボートで広島へ渡った。天気晴朗にして水面は鏡のようであつた。船は滑るように静かに走る。港は次第に離れてゆく。

十分程たつたころ、胸騒ぎがしてきたかと思ふと充滿した妖気にすっかり包まれたような雰囲気になつた。頭がふらふらする。強力な邪気の襲来に一時はたじたとつた。数分間のことだつたが、私には初めての経験である。甲板の椅子に腰を下ろして暫く水面をにらみつけた。ふと気がつくくと、妻の鈴月は帯をときながら転ぶように船室へ下りてゆく。今井苑長(※富藏、大倭安宿苑苑長)はワイシャツの前を開けたり、ズボンのバンドを忙しい手付きでさわつたりしていた。船は無事故で広島へ着いたのであるが、この時、この松山沖に強烈な妖気のあることが分かつたが、それが後日、どんな形の現象として顕われるか、私には全然分からなかつた。

松山沖での墜落事故のニュースを聞いた時、反射的に「来るべきものが来た」と思わず口走つた。この一瞬、私は既に定まれる不慮の災難という実感以外に何もなかつた。

五十人の命は朝露の如く果敢なく海の中へ消え失せたのであるが、この中で、十一組の新婚旅行客のことが何となく心に残る。

多くの人々からの祝福の声を耳に残しながら他

界した彼らは、こうなるべき宿命的な人々であつたと片付ければ、話は他愛もなくそれまでだが、仮にそれが彼らの宿命としても、宿命的な最終現象に到達するまでの時の移り方について、人間的な悩みや愚痴があとから起こってくる。というのも、事の変化は人間の意志によつて決められると錯覚しているからである。意志にはそれを発想させるもつと奥の何かがある。

彼らを死に至らした宿命的条件の一つに、十三日の災難日を「大安吉日」ということで、式典の日を選んでということが挙げられる。彼らの親近者達は、十一月十三日が若し「三りんぼ」の大凶の日であつたならば、こんな災難にはあわなかつたかも知れないと愚痴をこぼすに違いない。

社会にある多くの人々は、何かの宗教団体に入り信仰を続けている。これは一体、何のためだろうか、今や深く掘り下げて考える段階にきているのではないだろうか。

(十二)

昭和43(1968年)10月23日発行

『すさのお』第25号より

(法主、満56歳)

「私はね、信心をするような悪いことはしたおぼえがない」。こんなことを言う人に、私は今日まで数多く接してきた。主として近畿地方の男性に多いのであるが、そのあとこの種の人は「けれども、鳥居や路傍の地藏さんなどの前は必ず頭を下げて通る」とつけ加える場合が多い。世の奥さん方、あなたのご主人は如何ですか? 中には思ひあたる人があることと思う。

「神も仏もあるもんか、俺は無信心や」と言える人は、誠に幸福である。更にその気持ちで、最終の時まで持ち続け変わらなかつたとすれば、これに勝る幸せはない。私もそれを望むものである。数知れない信仰をもつ人々の中に混じって、無信仰で通せる人は、先ず健康で、衣食住にはことかかさないうで、それに性的欲求は満ち足りていて、仕事は或る程度自分の意思通り順調に運んでゆくといい好条件の中にある人が大多数である。

だが人生は変化の積み重ねである。一分一秒たりとも同じ状態はあり得ない。今の好条件は、時の流れによって悪条件に変わる可能性をもっている。今日の喜びは明日の悲しみになったり、一代長者が三代目は乞食になるというたとえの如く、私達が住む世界は浮世そのものである。

人の弱みと信仰心

こんな不安定な社会で生活している私達だから、自分の考え通り万事がはかどって行くのなら問題はないが、行かない場合に直面した時、人間がもつ本質的な弱さを見出すものである。その時、「かなわぬ時の神だのみ」とばかり、こんな人達は信仰の世界へ逃げこんで、自分が作った迷いや悩みを、平素無関心な神や仏に救いを求めるような卑怯な根性をさらけ出すものである。

こんな我欲根性をもつ人間が或る宗教に入信して、お社や木仏金仏に手をすり合わせて拝んだところで一体それが何になるだろうか。自分の欲望の手伝いを、神や仏にさせようとする態度である。その交換条件として、お布施(賽銭)や物品等を供え、なお祝詞やお経等を唱えるのであるが、結果は堂守りの人々が利益を得るだけで、神仏には何の足しにもならない。

こんなことに熱中するのを信仰と考えている人も少なくない。とんでもない信仰の履き違いである。

当初に触れた世俗の声にある、「信心をするような悪いことはしたおぼえがない」という言葉の中に、何か割切ったような深さがあるように思える。言葉からくる感じでは二通りに聞き取ることができる。

その一つは、何か罪を犯したことによって、懺悔滅罪のためにある信仰へ入るという意味と、もう一つは、何か分からないが生かされているお陰に感謝して日々喜びをもって暮らしておればそれでよく、忙しい時間をさいてまで特定の神仏へしげしげ足を運びお賽銭を供えて、自分の身勝手な欲望を一方的に押しつけてわざわざ拜まなければならないような悪いことはしたおぼえがないということである。

信仰の態度から見れば後者の方が望ましいが、世間では、ある神様を一生懸命に信仰したので、難病が助かったとか、商売が繁盛するようになったとかいう現世利益を絶対だと信じ、今も厚い信仰を続けているという多くの人々を私は知っている。現実には有り得ることである。

分かりますか、不動さん、観音さん、八大龍王さん、聖天さん、稲荷さん、地藏さん、三宝荒神さん、恵比寿さん等、挙げれば切りのないことだが、御利益信仰の盲信者達は、これらも信仰の対象にして自分の願望をかなえさせようと一心不乱に拜むことを繰り返すことによつて、御本尊(信仰の対象)は奇妙不可思議な神力を發揮して助けられるものと解しているようである。これを何の疑念もなく一途に信することのできる人は誠にお芽出度い人々である。

堂守りが使う賽銭

昔から堂相応の守りがつくというが、これにも一理はある。詣る所には必ずその堂と御本尊に仕え、それを守っている人間がいる。詣る人々は必ずこの人を仲介として御本尊と結びつき、御本尊からの御利益を受けるような仕組みになっている。

御本尊は金銭物品等は必要としないが、御本尊の代弁者になつている人間が必要とするところから、お供物の多寡によつて御利益の価値を決めるような説教をする。

現在の宗教団体や「おがみ屋」さん達は、本来の使命感を忘れて、世俗の人々と同じく宗教企業をまたた経営方針をとっているものが大部分のようである。信仰中毒者の多い現在において、信仰する者お互いが、日々自己反省して中毒患者にならないような信仰を続けることも必要ではないかと思う。

どちらへ廻ってみても、御本尊は立派な有名な名称を用いている。そして教義もある。

信仰すれば必ず現世利益があると宣伝して人々を集めるような所には、必ず或る種の霊体がある。例えば御本尊が不動さんや地藏さんと称していても、私の観たところでは、狸霊や蛇霊だけで、それ以外は何もない。商売繁盛で古くから有名な生駒聖天さんへ行つても、上の巨岩に大天狗がいるだけで大聖歡喜天などの霊体はない。

御本尊の名称は凡そ出鱈目なものである。全国には同じ名称の御本尊を祀っている所があるが、よくはやる所と、さっぱりはやらない所があるのが面白い。堂守りの手腕の問題である。

あじさいアルバム ⑳

昭和39(1964)年8月9日 法主様の日記より

(※摘記欄、見出し)「地元民百五十名余り、大挙「むすびの家」建設反対のため押掛けてくる」(※日記は翌日10日に書かれたのか、以下は流れから10日の状況のように思える)「九時頃まで寝てしまった。昨日はちよつと疲れた様子。白石委員長が来る。今日地元民との対談の件についての相談である。日元が鉢巻にて来る。自分(法主)の身を守ろうという気持だろう。生母さんが藤木に参らされて、わざわざ今日藤木の人達一戸に一人が参るとの情報を電話で通じてくれる。白石は疲れたか水ノウを頭に乘せていた」「地元民個人の意見も聞く(写真⑥) 旧拝殿で、窓から覗くのは邑人でハンセン病回復者のマルさんこと石丸慶三さん)。而し一歩先に皆の言いたそうなことを、こちらから喋ったので、唯だ中区(奈良市中町)が広い社会から村八分の形になる点を考へてほしいと言ふ」

(※9日の状況に戻っているか)「キャンパーの大部分はワークは休み木津川へ水遊びに出る、数人が残っていた」「午後三時半丁度、阿倍野の：夫人が見えた時、先に藤木の人達が来る。：會長が、昨日：から話を聞いたので学生に会いたいと拝殿にて対談。暫くすると東坂、熊取、砂茶屋(藤木も含め中町の旧字)の団体は直接自分から話を聞きたい、役員では通じない面があるからと言う。サニワに下りて(写真①②)、約三十分、広い角度から話す(写真③④)。家子達は側に来て護る態勢であった。中(町)の警官も私服で入

っていたし、又、毎日新聞、読売新聞もきてカメラにおさめていた」「自分が話の終わった時、学生達は木津川から帰る(写真⑤)。サニワで藤木を合併し、全キャンパーの話し合いが夕方まで続いた。双方にかなりの勉強になったと思う」「夕食後、拝殿に参る、学生達と協議する。2時に上る」



⑤



③



⑪



⑥



④



②

大倭会文化行事

に しきと べ 丹敷戸畔の慰霊の旅に参加して

大阪府大東市 坂田 洋 美

出発の車中で、旅の資料と共に丹敷戸畔さんの言葉(※昨年12月号、杉本順一さんの文化行事報告参照)を拝見して、私は心しておまいりしなくてはと座り直した。熊野には巡礼の旅も二度、他何度か来たことがあるのだが、二千年もの間、つらく苦しい世界にいらしたのかと思うと何とも申し訳ない気持ちになってしまった。

文化行事の感想を書きながら、津名道代さんの『国つ神情念史』を開きトベさん達の魂を感じるうちに、これまで三十年間、(両親の介護で十年ばかりをのぞいて)各地を巡礼してきた思い出がどつと押し寄せてきた。それらを合わせて書くことにしたい。そしてこれからの日本のあり方を深く考えるにつれ、「和の光」をしきりに思う。

Ⓛ 昭和39年8月2日は交流の家の地鎮祭だったが、その1週間後、地元民が押掛けてきた時の様子

Ⓧ 昨年11月号表紙写真は、昭和39年4月5日、建設用地整地のためワークキャンプ中のF1WCの学生達に話す法主様だったが、これはまた別の日、同キャンプ中に来られた鶴見俊輔先生



おな神の森に入っていく古道はとても心地良いところだった。杉本さんがここでと言われ、みんな「くのにのもと」を歌わせて頂き、次第に心は温かくなってきた。その小石を、杉本さんは記念に、持ち帰られた。私は見上げた高い木の満開の香しい白い花に心奪われ、小さな一枝をもらった。後で調べると、バクチノキという照葉樹だった。ああやっぱり丹敷戸畔さんは、沖繩、南九州、南四国という南方から来られた人たちだろうと思つた。縄文から弥生に、支配者は男に変わりつつある時代だったのだろうけれど、女首長のもとで人々は平和な郷を築いていたのだろう。自分だけでなくたくさんの郷人が殺された苦しみ痛みははかり知れないだろう。

法主様のお言葉として伝えられたのは「みんな（大倭へ）連れて帰れ」だった。何年か前の文化行事で大島青松園へ行つた時と同じだ。「みんなとは？」と伺うと、杉本さんの答えは「闘つて亡くなった人たちみんな、敵味方はありません。それが大倭の和の光です」だった。帰りのバスが奈良に近づく頃、夕焼けが始まった。あたたかなおだやかな彩り、それはそれは美しく、戸畔さんたちが喜んでいらつしやるに違いないと心ほのぼのしあわせ感に満たされ、みんな一緒に無事大倭に着いたのだった。

ふり返って、どうしてこんなにあちこち行けたのかと不思議な気がする。

在日でインド舞踊をなさる康米那さんと小林千賀子さんとの縁で、康さん達（かんみな）の「よみがえり」を祈る巡礼の旅に出会った。私の巡礼の旅は、秩父の武甲山から始まった。磐座もある聖地の山の石灰岩が、セメントのために削り取られているというのだ。

この頃、法主さんに「韓国は日本と一緒に」と伺ったことがあるが、韓国の聖地である太白山、智異山、伽耶山等も、日本と韓国のお仲間と歩いて、ずっと前からの親友のように交わり、韓国から日本に来られると私宅に泊まられた。

康さんがヒマラヤの尼さんたちを援助されていたことで、一九九一年の夏はヒマラヤ（インド・スピティ地方）へ二週間、日韓の二十名が参加。キャンプしつつの人間関係も含め、土砂崩れや川になったりで道が寸断されたこともありで様々に大きな学びだった。ヒマラヤに魅せられて高倉敦子さんには一人でも子連れでも行きたい所となっていた。

沖繩久高島の、白砂の美しいイシキ浜で、二〇〇一年の初日を拝したこともあった。波が一直線に寄せてくる所だった。

山尾三省さんの朗読の会のお話で、木花之佐久夜毘売や岩長比売にたとえられ、富士山の美しさは地下深く秘められた暗部があつてこそと聞いたことがある。富士山の洞窟も、私たちの求めている母なる存在だとおまいりしたこともある。この時は松本モトさんが一緒だった。その後、若い方々が富士山頂上へも巡礼した。

二〇〇一年の二回目の熊野巡礼の時は、それぞれ連れ合いの男性の参加が多くて私の夫も参加したが、岡雅子さんは禊用の禪まで縫って準備して下さった。今井徹郎さんはキーボードを持って同行、あちこちで音魂を響かせてくれた。最後に花窟神社でお祭りして解散したのがついでこの間のようだが、今はすでに霊界にあられる方もいる。

熊本も長野も山形も、近畿では星田妙見宮、箕面、淡路島の沼島へも。等々、こんな私たちを津名さんは応援してお手紙を寄せて下さっていた。

二〇〇二年五月、東北の旅は高橋延之・末子夫

妻に迎えて頂き大変お世話になった。飛行機から円い虹が見え、歓迎して下さる御魂を感じないではいられなかった。石塔山にもおまいりさせて頂き、キラキラ緑輝く東北の旅は忘れがたい。

二〇〇一年の東北大震災後、思いがけず金華山での奉納舞に参加させて頂くことになり、アマミ舞を始められた花柳鶴寿賀さんとお会いする。また次の年、出羽三山を巡礼させて頂くご縁にも恵まれた。

その後、私は目の病氣、腰の圧迫骨折と次々身体を痛め巡礼はすっかりあきらめていたが、体を横にしたり休みつつ、アマミ舞も再開、聖徳太子御廟への大倭の文化行事にも参加し、そしてまた漢方研究会の小旅行にも参加できるようになった。

今回、秋の大倭会文化行事の後、漢方のお仲間との「いのちの源流を訪ねる旅」へと、何と二週続けて熊野行きということになってしまった。迷ったものの、どちらにも参加することが実現した。玉置神社から青岸渡寺まで表と裏の熊野をたどり、法主さんのおつしやる「自然神」と深く出会う旅となった。くねくねと曲がった細い山道を車で一時間以上も走つてようやくたどり着いた大丹倉や宝竜の滝、太古のエネルギーをそのままの磐座で瞑想したり、水しぶきを浴びながら龍神を感じたり、修験者に護摩焚きをして頂いたりした。

私は若い人に交じって、時々手取り足取りしてもらいながら登ったり下ったり「神様ありがとう、皆さんありがとう」の旅でした。身の周りではほとんど見られなくなった竜胆の青い花を、熊野のあちこちで見ることができた。ヒマラヤの旅で雪解け水が流れるほりにいっばい咲いていた竜胆と、竜胆と交流するうち高山病による頭痛が消えた、さわやかな朝を思い出したのだった。

旅で出会ったある青年の記憶

奈良眞檀原市

浅井 克明



横浜から上海へ船で渡った20代半ばの夏。座り心地の悪い列車の二等席と古びた長距離バスを乗り継ぎながら、僕は中国・パキスタンの国境を指して、西へ西へと陸路を移動していました。

これから書かせて頂くのは、今まであまり話したこともない、30年近く前の忘れがたい旅のエピソードです。

新疆ウイグル自治区の首府・烏魯木齊（ウルムチ）市に着いた列車を降り立った僕は、一時滞在する宿を探していました。ここは中パ国境を越える中国側の玄関に当たる地域です。外国人バックパッカーたちがよく利用する安い相部屋がほとんど見つかり、すぐ3日間ほど宿泊を決めました。新疆ウイグル自治区住民の半数以上は、中央アジア一帯の国々に暮らすテュルク（トルコ）系民族。中国人口の9割以上を占める漢族とは見た目も風習も異なり、イスラム教徒の醸す独特のエキゾチックな風情が印象的な人々です。

さて、僕の相部屋に老若男女取り混ぜたテュルク系民族の団が宿泊にやって来ました。家族のように見えます。数日間一緒に過ごす友人として、さっそく1人の青年へ話しかけてみることに。

ところが、これまでなんとか通じていた下手くそな英語も、発音が不正確な中国語も、データラメな漢字の筆談も、わからないと彼は静かに首を振ります。どうやら中国人ではない気配が濃厚です。

そこで一計を案じ、荷物の中から世界地図を取り出してベッドの上を広げました。地図を使って

自分は日本人だと自己紹介を試みたのです。地図上の日本と自分の顔を交互に指差すと、なるほど、とばかりうなずく彼。意図が通じたようです。

今度はその青年が地図の上を指差します。そこは中国の北西にある、小さな隣国。旧ソビエト連邦のキルギス共和国です。

続いて彼は履いていたズボンの裾をめくって、片方のふくらはぎに浮かんだ黒つぶく丸いあざを示しました。直径1センチくらいでしょうか。意図を汲みかねて、あざを不思議そうに眺めていると、彼はゼスチャーを始めます。小銃を構えて撃つ人物のまね。兵士でしょうか？

銃らしきものの先から何かが飛び出して、足のあざへ向かう軌跡を彼は指で描きます。その瞬間、僕は彼が何を伝えたいのか悟りました。そのあざは、銃創だ。弾丸に貫かれた傷痕なのだ。思わず身がこわばり、息を飲みました。

その穏やかな青年は、隣国の中国へやって来た経緯を身ぶりですら説明してくれたのです。当時の旧ソビエト連邦に所属する中央アジア諸国は、ソ連崩壊による国家体制の変革期にありました。キルギスでは、その少し前に民族間の対立による衝突が生じ、流血の惨事もあったと聞きます。彼の身に何があったのか、今もわかりません。

安全を求め家族ぐるみで隣国に逃がれてきた……その時はそう想像するのがせいっぱいでした。衝撃的な事情に動揺しつつも、身ぶりに手ぶり、世界地図、メモ用紙に書いた絵や数字などを総動員して、お互い自己紹介をできる限り続けた末に、どういうわけか、僕たちはとても親しくなりました。まるで旧知の仲だったみたい。

旅行者の間をあちこち走り回る、人懐っこい漢族の少年もいつのまにか仲間に加わりました。持ち物を貸し借りしたり、一緒に外出したり、スイ

力を分け合ったり、青年に教わった異国のルールでトランプ遊びに興じたりしたものです。

僕が宿を去る日、手を振ってお別れのしぐさを伝え、キルギスの言葉で「さようなら」を覚えてもらいました。数日間を共にした異国の家族らにその言葉を告げた後、本当に名残り惜しい気持ちで部屋を出たのをよく覚えていました。

キルギスの青年と、日本人の僕と、漢族の少年。3人の間には共通語が存在せず、最後まで片言の会話すら交わせませんでした。

なのに、どうしてあれほど仲良く、楽しい時間を共に過ごせたのか。一時にせよ、見ず知らずの他人、それも人種・習慣・文化が異なる外国人と極めて親しい関係になった経験は後にも先にもなく、30年近く経った今も、本当に不思議です。

銃撃される心配などみじんもない平和な国から物見遊山で訪れた旅行者として、彼の境遇に同情や負い目を禁じ得なかったのは確かです。しかし、それだけが理由ではなさそうです。

言葉に頼れないからこそ、相手の心情を全身で察しようとする気持ちが常に働いていたのでしょう。そして、言語や人種の壁を超えて意思疎通が図れた時、お互いの胸に湧く原初的な喜びが、とても大きかったからではないかと思えます。

ところで現在、新疆ウイグル自治区では、民族独立運動の隆盛をなんとしても阻止したい中国政府による、非人道的な介入がますます強まっています。国際社会から非難が集まるも当然の、胸が痛む報道ばかり目にする昨今です。

異なる部族、民族同士の頭上に「和の光」が金鶏のごとく燦然と輝き、矛を収めて対立をやめ、穏やかな共存を始める。大倭の伝承に記されたような未来が、いつか思い出の地にも到来することを強く願わずにはいられません。

寸 莎

第140回

梅澤 好弘さん

登美之郷だより

新皇教官関係者として実家の弟・梅澤好弘の紹介という依頼をお受けしたものの、弟と話をしながら、結局、家族として私自身の立場も交えて書かせて頂く形になりました。

好弘は、昭和26年8月20日生まれ、埼玉県熊谷市の梅澤家の長男です。代々梅澤家では長男がうまく育たず、父・弘と母・和子は、長男の成長を心配しながら毎日を送っていました。縁起が悪いかもしれないと、家の入口にある大きな石柱も撤去し、屋根よりも高い銀杏の木も切り、敷地にあった池も埋めてしまいました。それでも家の中にいるとミシミシと音がしたり、誰もいないはずなのに2階で人が歩く音がしたり話し声が聞こえたりが続くので、占いをしている人にお札をもらい、天井に貼ったりしていました。ある日母



が寝ている時、はっと目が覚めるとのしかかるように血まみれの武者の顔があったそうです。びくくりして母の心配は募りました。

誰か見てもらえる人を知らないかと、母から私に電話がありました。ちょうど私の夫・得田壽之が九州旅行をして途中で大倭紫陽花邑に寄って帰ってきたところで、矢追日聖さんはどうかと父母に伝えました。いつもは夫に不信感を持っていた父ですがすぐに大倭に行く事に決まり、父と母と私が昭和61年5月6日に大倭神宮月次祭にお参りしました。

今までの事をお話すると、法主様は「この人は千年位前の武將で、霊界で苦しんでいる」と言われました。父はすごく緊張したようですが、自分の父（私には祖父）に法主様が似ていると言うと、法主様はメガネをはずして「似ていますか」と笑って下さったり、鈴月かあさんが、早

く御霊鎮めしてあげるようにと助け船を出して下さったりしました。

6月15日に再度父と母と私、今度は好弘も大倭へ行き法主様にお会いして、瑞光院で「重弘坊大善神」というお名前を頂きました。父の弘、長男の好弘、次男の勝弘を重ねるという意味なのか？ 法主様は右手の人差し指を天井に向け、「直系や」と言われました。弟は今でもその情景をよく覚えていと言います。また「よくその年齢まで生きてこられた。ご先祖さんがやさしい人だからこの程度で済んだ」とも言われました。

重弘坊様は「修羅道で苦しんでいる。修羅道にいる霊人は心が安まることもなく、子孫に助けてもらえず苦しみぬいている」と聞きました。法主様のおかげで、梅澤家はやっと重弘坊様に会えたのです。7月には夫が大倭へ行き、「平将門さんですか」と聞くと、法主様は「あ、知ってたのか」と言われたというのです。後日、何回か法主様にお会いした

中で、「夜、寝ようとして電気を消したら、目の前にパツと馬にまたがった武將がたくさんの武者を従えて現れた。明日誰が来るんやろと思っていたら、あんたらやった」と言われたのが思い出に残っています。

重弘坊様には毎日、お塩と洗米、お水をあげてご挨拶することを教え

て頂きましたが、法主様は「神様に對するようではなく、肉親のおじいさんが一人増えたと思って、一緒に生活するように接するのがよい」と言われました。

東京都千代田区大手町の将門さんの首塚にも度々訪れましたが、昭和63年2月14日(将門の命日)に、弟から自分は仕事(医師)で行けないので代わりに行ってほしいと電話があつて、夫と私が首塚へお参りしました。その時に中村家の長女の馬場美佐子さん、次女の石川千鶴子さんと出会ったのは偶然でした。

ところがその縁から中村家の方達も法主様にお会いして、新皇教官創設につながり今に続いています。何事にも時機があると法主様が言われたのを思い出します。感謝です。その後、弟は体の具合が非常に悪くなつたし、夫が平成25年に亡くなった時、私は実家で弟と一緒に暮らす事にしました。車の運転もできず、新皇教官へも行けない状態がしばらく続いたのですが、大倭会員の平成26年秋の文化行事で新皇教官へ来て下さる事を弟に伝え、と、「ぜひ参加したい」と言ったのでちょっとびっくりしました。

久しぶりの新皇教官は、大倭神宮へ行った時と同じような気に満ちていました。(写真右側、得田典子記)

あじさい日誌

1月11日 午後4時から奈良パークホテルで邑交会の新年会が行われました。

1月12日 祝会。この日は京都市西京区の加納さん一家6人が参加されました。

1月13日 快晴の下、午前9時半、教長さんにより点火(写真、西斎庭で「大とんど」。正月の飾り物や大倭神宮の枯れ竹等をお焚き上げしました。恒例のぞ



ボランティアグループ

「あじさいの箱」 第39回懇親会

令和2年3月21日(土) 11時~14時

■大倭会館にて

■会費：1500円(昼食代)

(昼食要予約 且田 0595-68-4108まで)

*大倭安宿苑常務理事・矢追明昌さんのお話

*活動報告他

ご自由に
ご参加を!

んざいや大根炊き、焼き芋も。

1月15日 大倭神宮月次祭。

岸田哲さんの初孫、岡本愛琉

ジャン君が、娘若葉さんに抱か

れて参拝されました。

1月16日 午前10時半から拝殿

で大倭殖産(株)の関係各社の「安

全祈願祭」が開かれました。

1月23日 大倭大本宮月次祭。

この日は平成4年1月23日の

法話をお聞きしました。(平成

28年1月号『おおよまと』に

「やわらぎの黙示」を出版し

て思うこと」して掲載分)

1月25日 林修三さんのお母さ

ん、林由子さん(満94歳)が帰

幽されました。

1月26日 午前11時から大倭会

館で、教長さんを祭主として見

田暎子さんの一年祭。高橋良美

さんは1月22日から昇ちゃんハ

ウス滞在。祭典後の直会は、い

つも暎子さんが心を砕いてくれ

た雰囲気そのままに多彩な皆さ

んの交流の場となりました。

1月28日 ハンセン病家族訴訟

原告団の副団長の黄光男さんが

奈良県橿原市で講演、その支援

グループ数人が「むすびの家物

語」を読んで関心があつたので

と交流の家に宿泊されました。

遅れて、黄さんも合流。

2月2日 矢追房子さん、山崎

正知・波留茂夫妻が教務本庁で

玉緒祭の福豆煎りをしました。

2月3日 玉緒祭。
この日は昭和52年2月3日の

録音をお聞きしました。法話と
してでなく車座になっての語り
合い。(平成12年3月号『おお
やまと』に「玉緒祭の日に節分
の由来を聞く」として掲載分)

2月6日 大倭神宮月次祭。

夜、大倭会館で邑倭の会。

2月9日 法主帰幽祭。午後1

時40分から法主奥津城のご挨拶、

2時から拝殿において祭典

が行われました。この日は平成

2年12月23日の法主降誕祭のビ

デオを見ました。平成3年3月

号『おおよまと』に「宿命につ

いて・美津留気について」とし

て掲載分。そこから引用してお

きます。(省略部分)

《美津留気という名前にして

いますが、世間で言うところの

お守りです。…御利益中心の

信仰に傾いては困るので、いつ

も否定してきた私なんだけれど

も、やつぱり：皆の要望もあれ

ば、ある程度、聞いてあげない

とあかんなあとという、これはま

あ私の老化の弱気だと思いま

す。…美津留気というのは：神

さんの：気が満ち満ちておると

いう意味です。…美津留気を持

つた時は、大倭神宮の神さんと

共に生活しているという気持ち

に於て扱ってほしいと思いま

す。粗末にしたら罰当たるんや

で、これ、はつきり言うておく

けど。…私自身の家族が、罰当

たつて難儀してきたんやから。
伝説の昔話(でなく)：現実の

話なんです。》

ということで、1月号の大倭

神宮の表紙写真も、「ミツルギ」

と思ひ心して扱って下さい。

大倭安宿苑では

(菅原園)

1月1日 創立記念日でした。

(須加宮祭)

2月3日 モリオ美容による女

性のヘアークット。

(長曾根祭)

1月8・9日(デイサービス)

ご馳走、ビンゴゲーム・獅子舞

踊り・職員の出し物等で新年会。

1月16日(特養) 11名の方の誕

生日会。

(茂毛路園)

2月3日 節分。職員扮する鬼

には新聞紙を丸めた「豆」を。

(八重垣園)

2月9日 お雛様の飾り付け。

埼玉原飯能市 康 米那

坂田洋美さんへ

『おおよまと』12月号(を送

って下さって)ありがとうございます。

杉本さんの「幽界の

丹敷戸畔 その闇を照らす」を

読み、感慨深いものがありまし

た。2000年前の苦しみを、

今まで誰もとまげずることがで

きなかったかという問いと、一

つの巡礼、慰霊祭で、それがほ

どけた(?)という事実が驚ろ

かされました。やはり縁のある

方が、心をこめて下さったとい

うことが大きいでしょうね。

編集後記

この次の洋美さんの巡礼記を楽
しみにしています(今号5頁)。
私達が沖繩や石塔山で行った祭
りの数々が思い出されます。
「大いなる母」の蘇りを願う巡
礼を始めて30・40年にもなるの
でしょうか、最近はその巡礼が
どんな人々の内側に向かって
いる気がしています。自分の中
の「大いなる母」の種が、どん
な風に蘇るのかを見つめていま
す。お元気で! (1・31)

▼「神通力如是」について感想
を寄せてくれる方がぼつぼつ増
えてきました。その中に、テレ
ビで宮中の歌会始の朗詠の独特
の節回しを耳にしたが、長音符
「ー」だらけの原文を、こんな
風だったのだろうかと思つたと
いう方がありました。(春)

あんない

*月次祭(大倭神宮)

3月6日(金) 午後2時より大

倭神宮にて。

*大倭会主催第614回祝会

3月8日(日) 午後2時より大

倭大本宮拝殿にて。

*月次祭(大倭神宮)

3月15日(日) 午後2時より大

倭神宮にて。

*月次祭(大本宮)

3月23日(月) 午後2時より大

倭大本宮拝殿にて。